

金沢市 駅西消防署

小泊 大貴さん

【お子さん】令和4年10月生まれ

【育休取得期間】69日

消防の現場で初の男性育休を取得。あとに続く後輩たちに先駆けとして道を切り開いた。



—育休を取ろうと思ったきっかけを教えてください。

妻の3人目妊娠中に、男性の育休取得率が増えているというニュースをよく見聞きするようになりました。自分の親も妻の親も遠方に住んでいて支援を頼みにくいし、職場に相談して可能なら取りたいなど

思い始めました。

ただ一般的な職場と違い、消防の現場職員の勤務体系は、朝 8 時半から翌朝 8 時半までの 24 時間勤務。何かあれば夜間も早朝も関係なくチームで現場に出動しなければならず、一定の人員が必要です。今いる人員をやりくりして編成を決めるので、誰かに休みの予定が入ると、他の人の休みが減ることになります。育休を取得したい気持ちはあったものの、現実的ではないかもという思いもありました。

—なるほど。勤務時間や人員の編成など、一般的な組織とは異なるんですね。

さらに私は消防署に勤務して 14 年目になります。現場経験を 10 年以上積んできて、チームの中心として動く年代になりました。消防車を運転するにも救急車に乗るにも、経験や免許や資格が必要で、一定の年数を経た職員でないとこれらに対応できません。署内では消防担当と救急担当がある程度分けられていますが、自分のような職員が、救急隊の役割を果たしたり、消防隊として出動したりと、オールマイティに現場を支えるポジションとして動いています。

男性の育休など想像もできない世界

—要請があればすぐに駆け付けなければならない特殊なお仕事で、しかも中心的役割の年代。これは育休を相談するハードルが高そうです…。

相談する心理的ハードルは非常に高かったですね。消防の現場では、男性の育休などありえなかったの。「取れるの?」「それ女性だけの権利じゃないの?」という世界です。先輩や所属の長、他の上司など、いろんな人に相談してみたものの、前例がないので、みな戸惑うばかり。市役所の本庁にも相談しました。いろいろと聞いて回った結果、「制度はあるから取得は可能。ただし育休で抜けることによる人員不足が懸念材料」と告げられ、現場でよく話し合うよう言われました。

人員編成の難しさは自分が一番よく知っているのですが、現場の職員に協力を仰ぐのは、最初は正直気まずかったですね。みんなが困惑している雰囲気を感じたので、「育休を取りたい」と言い出してしまったものの、迷いも生じました。

—状況を想像するだけで、なんだか苦しいです…。

そうこうしているうちに出産が 2 か月後に迫ってきました。いろいろ悩んだけど、ここまできたら押すしかない。「自分の親にも妻の親にも支援を頼めないのです、どうか取らせてください。お願いします。」

と頼み込みました。上司たちは私の強い思いを汲んでくれて、「今と昔じゃ時代も違うからな。制度として取れるものだし」と、取得できる運びになりました。現場の職員も、休みが減ってしまうかもしれない中で協力してくれて、本当にありがたかったです。

仕事より楽かもという期待は完全に甘かった

—やっとの思いで取れた育休、いかがでしたか？

24時間勤務を長く続けてきたので、最初は「よし、やっとな夜中寝られる」という安堵感でいっぱいでした。自宅と職場が離れているので、通勤の長距離運転から解放されたのもうれしかったです。育休中は少し楽ができるかもという期待があったのは否めません。妻は「これから大変になる」と覚悟していたのに、今思えばずいぶんお気楽でした。

実際に育休が始まってみたら、気づけば1日が終わっているという毎日です。朝、小中学生の上の子たちを「いってらしゃい」と送り出して、炊事や洗濯をしながら3人目の世話をしていると、「ただいまー」と帰ってくる。「え、もう夕方？」という感じです。毎日がその繰り返しだったので、2か月少々の育休期間があっという間でした。

生まれたばかりの子どもって何が起きるか分からないんですよね。家事をしながらも、集中力を子どもに向けておこななければならない。交代で見ているもしんどかったし、休めるかもという期待は完全に甘かったです。1人で子育てをする女性の大変さが分かって、今まで何も気にせず仕事に行っていた自分を大いに反省しました。もしかしたら仕事の方が楽かもしれない。育休中は、家の中のことをしながら、上の子のPTAや地域の行事にも積極的に関わりました。仕事をしていたらなかなか参加できなかったのも、これもよい経験になりました。



—充実した2か月だったことがうかがえます。

もうすぐ1歳になるんですが、まだ夜中に起きて泣くんですよ。これは1年取るべきだったかなとも思いましたね。妻は「育休の間一緒にいてくれたことで本当に気持ちが悪くなった」と話してくれました。言葉が通じない子どもと2人きりで過ごすって思いのほか大変ですから。

上の子どもたちも私が家にいることに安心してたようで「ママひとりだったら大変だよ」「パパがいるとひまつぶしになる」と言われました（笑）。家族みんなにとってプラスになったなら、こんなにうれしいことはありません。

夫婦なんだから2人で子どもを育てていきたい

—新たな気づきがたくさんあったようですね。

子どもが生まれると、環境が劇的に変化します。妻と私はあまり喧嘩をしない夫婦ですが、それでも私が夜間に不在にすることが多かったので、小さな喧嘩は何度かありました。でも育休中は、互いの思いをすり合わせて、話し合う時間が持てる。余裕ができたことで、気持ちのすれ違いが減りました。

この経験を通じて、男性だから女性だからではなく、夫婦なんだから 2 人で子どもを育てていきたいと改めて感じました。ひとりに任せるのではなく、家族なんだから家族みんなで命を育てていきたい。男性はどうしても仕事の比重が大きくなるけれど、分担することはできますから。

デメリットをあえてあげるなら、復職の際の不安感でしょうか。こんなに長期で仕事から離れたことがなかったので、仕事を忘れてしまうのではないかと少し心配でした。

—実際に仕事に復帰したときはいかがでしたか？

「あ、こういう仕事だったっけ」と慣れるまでに1週間くらいかかりました。比較的規則正しい生活を送っていたのが、仕事に戻ると、再び朝から翌朝までの24時間勤務。夜中ずっと起きていることや、急な出勤など、しばらく勘が戻らなかったですね。部活で故障して数か月練習を離れると、復帰した後すぐに本調子で動くのは難しいじゃないですか。その感覚に似ているかもしれません。

この経験を通して、女性が育休を取って職場復帰する際にはいろいろと大変なんだと気づきました。長ければ長いほど、仕事の感覚を取り戻すのに時間がかかるんじゃないかな。こういうのって経験しないと分からないですね。

「取ってくれたおかげで言いやすくなった」と後輩職員の声

—現在はどうのような形で育児と仕事をされていますか？

職場復帰して24時間勤務の現場に戻りましたが、今年の4月からは事務に異動になり、平日の朝から夕方までの一般的な勤務時間になりました。急な現場出勤がなくなった分、余裕を持って仕事ができている、余裕を持って家族にも向き合えています。

週末の休みには家事や育児をやっています。子どもはもうすぐ1歳で、行動範囲も広がって目が離せなくなってきたので、気合いの入る毎日。寝るときだけが気を抜ける時間ですね(笑)。



—誰も男性育休を取ったことのない職場で、まさにパイオニア的存在だったと思います。

実は自分が取得した後で、消防署内でも男性育休を取る現場職員が次々出てきたんですよ。後輩職員からは「取ってくれたおかげで言いやすくなりました」と感謝されました（笑）。今こうやって賛同の声をもらうようになり、あのとき「何がなんでも取ろう」と勇気を出して取得した甲斐があったと思っています。先駆けとして切り開くことができ本当に良かった。

経験者として伝えているのは「男性も女性も関係なく取った方がいい。これは権利なんだから」ということ。ただ育休中は、予想と違って自分の時間はないし毎日が手いっぱいだったのも事実。だから「ただし、育児は甘くないぞ」と付け加えています（笑）。